



俳諧七部集

阿孫野
附
負外

七

14
3157
23(7)



14
3157
23
(7)止



曠野集負外

誰か毒をねもささく母を地
 中へあきて朝のくさくさ
 又舞へば東四明み麓り
 きて花のまろくはをん
 ぐりく佐川田まろくのうの山
 あさあ〜とらるるまも
 こくんす又

麦喰し厚とさくさくは
 世夕尾陽の影あまは作
 芭蕉翁の傳へ〜をん

笑—にけらつ出回野へ居る
実と世の成感もむ—
さき—人の中に虎のお宿は
さき—進を認する人ありて
独色を愛する—
お月—うらやまのほし
様をきて—實に下る—
あ—の—の—
杜乃—の—
夕—ひて

素堂

麦を—の—



この文人乃る—
さ—の—
あ—の—

お—の—

野水

鏡の臨も志を—

荷今

もの志の—

越人

川結石月結園のや—

水

風の月利を—

今

柏木の脚瓦の比のつゝと
さくやういとのまゝあつる
月乃影とくし合とかり辻お積
秋となふとく孝里乃酒桶
高の志く流すの持く出る言
うれとよきのぬる彼乃糸糸
かこある諫之流こほあし
火箸とくしとくしとくしとくし
今水人今水人今水人今水

うへすまのんさる人のん
あせむとくしとくしとくし
むさの孝教まじとくしとくし
押くまぬとくしとくしとくし
里土ろくしとくしとくしとくし
大根とくしとくしとくしとくし
今水人今水人今水人今水

大泉の清き水は
 秋の風を吹かす
 舟の影を揺らす
 月影を照らす
 雲の影を映らす
 雪の影を消らす
 花の影を散らす
 鳥の影を鳴らす
 虫の影を舞らす
 人の影を去らす

遠沙也浪に志あさす潮と季
 舟もれ舟もれ又酒のあまじき
 のときやあがり泊る何と解て
 百足乃懼る茶とこがらみ
 夕月の雲に白布をうら依
 秋寒の蓑も裾より引き残

舟洞
 舟令
 昌碧
 野水
 舟泉
 釣雪

秋乃多事とこともたつた所そや 筆

一駄るる一は 是と古錦 糸洞

そののるよまきききききき 四糸麻 荷今

糸す糸山とねあふと平一糸 昌碧

いふとあつてあつた大藏造 釣雪

湯殿さいものをもむじり川也 舟泉

涼一やと恋とくくく川の響 野水

いふかきあふいふ一は 月 荷今

秋凡一女車の髪氏ねとと 糸洞

神そあつたをい 環機も法輪 釣雪

時くよまのさくくたあひのま 昌碧

いふまゆあつたをい 野水

日乃いてやらふら何も人暖り 舟泉

いふまけりい 糸洞

向まて 寝やるほもの小あひにて 荷今

垢離かく人のまののびきき 昌碧

配所より千の泉のか減るえつ 釣雪

さうさふさふあまのちをく 舟泉

むく起るあつきく赤腫と 野水

川をさしり 荇子よりひこむ 荷今

いささかし是怪野一の藪海し 亀洞

ねむりあふもむとねむとさる田尻 釣雪

あまのつあふとるとの下戸は月 昌碧

やもら秋乃やもあふさなは 野水

つらつらねむる 舟泉

あまのつあふとる 亀洞

夏の目やえるる 荷今

桶のかつらふ入し 昌碧

人なまに脇をさして 釣雪

つらつらねむる 野水

水

松

松

松

松

松

舟泉

舟泉

舟泉

舟泉

舟泉

舟泉

舟泉

舟泉

ふも亦との拾ひむとらむる 荷今

るふりく 砂の中み木のて 冬文

火風の皮みまふなるく 舟泉

炭見せしやうら笑はつ 松芳

ふるとも紫端まうてそふは 冬文

酒の半く膳もちてふい 荷今

柴を牛一を順礼とをすに 松芳

とよて双身の糸絡をせよとる 舟泉

やうゆりもくち志をアハハの息 荷今

月のたほらやぶるの井乃及 冬文

灯にまばねひつてまの風 舟泉

珠珠をさこのまて脇息のて 松芳

豫辰も入齒くまの志はうと 冬文

十日のこくみわしとむるこ 荷今

山星の秋をくしと生翳 松芳

そおかめくくさやとむ 舟泉

ふふ〜ふふの秋を風は月の影 荷今

馬乃ととも秋をくするのいあ〜 冬文

さひ〜さひの雲舟の宿のあは雨 舟泉

庭ぬま〜幕まあふ〜と申 松芳

〜と〜と綿の〜の〜 冬文

晴ぬ〜と〜提燈品〜とむ 荷今

け〜の花と〜と〜とす〜と〜と 松芳

味〜と〜と〜と〜との隣〜と〜と 舟泉

芳〜骨乃〜と〜と〜と〜と 荷今

秋〜と〜と〜と〜と〜と 冬文

暮〜秋〜赤貝と〜と〜と〜と 舟泉

秋〜と〜と〜と〜と〜と 松芳

〜と〜と〜と〜と〜と 冬文

秋〜と〜と〜と〜と〜と 荷今

新

廿

初あ〜〜〜〜〜の露の坊主は 水
 菜畑畑の風や〜〜〜のま〜〜 今
 土肥を〜〜〜〜〜のま〜〜 全
 下判木と〜〜〜神を〜〜〜 水
 通飯の〜〜〜〜〜のま〜〜 全
 六位のあ〜〜〜〜〜の〜〜〜 今
 代よ〜〜〜〜〜のま〜〜 全
 錢一貫〜〜〜 一 糸 一
 水

月乃節のま〜〜〜〜〜のま〜〜 全
 茶喫は〜〜〜〜〜のま〜〜 今
 天仙美〜〜〜〜〜のま〜〜 全
 うちのま〜〜〜〜〜のま〜〜 水
 た〜〜〜〜〜のま〜〜〜〜 全
 又〜〜〜〜〜のま〜〜〜〜 今
 鳥のま〜〜〜〜〜のま〜〜〜 水
 秋のま〜〜〜〜〜のま〜〜〜 今

題

註

先つていふよき水全見 水

八日乃月の水全 水

山乃鶴又松と根の水全 水

水全 水

異の日や服の水全 水

太鼓た水全 水

ころくや水全 水

元た水全 水

忠小水全 水

庇を水全 水

三方の水全 水

供奉乃水全 水

後の水全 水

人た水全 水

Handwritten text on the right page, consisting of approximately 10 vertical columns of cursive Japanese characters. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

月さりのほろもさる登の目もあはれ
わろろろろろ柄をさるるるるるる
團の帝親法所乃をすし
夏の世は病のしちげを病をすす

月一柄をさるるるるるるるるるる

蚊のねるはるるるるるるるるるる 越人

さしくるるるるるるるるるるるる 傘下

ねあひるるるるるるるるるるるる 同

さふ木柱つるるるるるるるるるる 人

使の者るるるるるるるるるる 同

ぬれぬれと猫の子を選りしむるが筆
 ちりちりきりきりあはしむる下
 さこそまじりまじりのあえさしおきな
 まよおもひけり泣きすする人
 大勢乃人又法華をこゝろゆく
 月さらり夕ぐぬれ籠へ下
 喰ふ柿も又くふくとも皆品一
 秋乃きりきり細みる人

くのまじりつらばきさかへり同
 寝るのく書る文字はゆるむ下
 花の賀うくくくくくくく同
 鳥のの鞠はこそとまきく下
 うらうらうの浦の管の極下
 内へといひて今やわゆる下
 酔さゆのあはれはくくく同
 多きけり今は雨乃降出し人

歌あもせぬ古籙首あつて
中 献立のそ風ちのたやあま
灯其お油の油しと押く
白とたせんそすくそあ
ゆく凡そあつてはのあつと
半ちこそすすくあつて乃秋
ちつとと月とあつてのあつて
人の徳こそあつてあつて
人 同 下 同 人 同 下 同

はさつとく凡やあつてを荷ひぬ
下
下もあつてのあつて中
人
わつとく小法のあつてあつて
下
皆同とあつてあつて佛
人
百千万とあつてあつてあつて
下
回無とあつてあつてあつて
人

かゝるもの長安は是れ名刹の地 全

醫のねんきりや月ころり 蕉 越人

いそしと作きりきりきりきり 芭蕉

あつたさびたつたさびたつたさび 越人

はまの古きさきさきさきさき 芭蕉

足跡のつら雨乃あけほの 越人

きぬきぬきぬきぬきぬきぬき 芭蕉

うづらひききたるききたるき 越人

ふとつこのあそびの尻腰もすし 芭蕉

おいろくさとい舟ぬきなりき 越人

月とむ比良のさるねをよほ 芭蕉

ちく雀ささむつるころり肌ぬき 越人

破れ戸の軒くら付あまの未 全

んをハさひりこと来みひきり 蕉

家ぬくて眼ぬきよはむ十寸鏡 人

そのねあひなる神子たものみ 蕉

人 去ていさしは 聖乃白ひくち

幼 衆と繁るる 堂とら片隅

本ととまは 風のあるく 光はと

垣 抱のこし 歩をたると 宿はと

あやにくと けふ妹より ありは

はのきくを たらなみこつと あり

り月 照ると 照るると 照るに

花と 遠く 朝のいねふり

秋の 田をわき ぬらるる 秋をひき

はら〜 あ〜 文字 問とら

いら ぬ〜 瓦 庇とら 木 葉を

馳 走と ぬら子乃 柳とら 風を

をの 比 倍 義と ありと 也はし

甲の〜 とも〜 暱とら ち

蕉

蕉

人

蕉

人

蕉

人

蕉

人

蕉

人

蕉

人

蕉

人

蕉

あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人

翁と伴をゆくまゝ人の

まろし 具角

あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人
あはれなる人

恨るる 洞さしむるさるるく
 静海前く舞をすしるる
 空輝の雛魂乃ぬのねら
 あとさるるるるる金二刀あ
 いとさるるるるる人さるるる
 やけさるるるるるるるる
 洞鼓さ身くくくくくくくく
 負をもつるるるるるるる
 人 全 角 全 人 全 角 全 人

そをいらの写士と浅きく枝の枝
 心やけしるるるるるるる
 饅頭をくくくくくくくく
 うきせくつてて死ぬ人ハ損
 西王母東方朝とも月よかんす
 よりや鸚鵡の舌乃るるるる
 あらさるるるるるるるるる
 志の親さるるるるるるる
 人 全 角 全 人 全 角 全 人

や、おあひる疾も〜おく御守
 来つ〜青も原〜をなかりり
 夕霧宿のそと〜服乃〜は
 くののほきを存み強力
 穴いちよ塵うちち〜草一枕
 ひいあ〜り〜仔珠の八朝
 満月と不ぬ梅を流え〜や
 念者法師を、秋のあ〜の海
 全 角 全 人 全 角 全

父ま〜御〜さ〜〜と〜西の子
 弓ら〜ひ〜る〜突あきのよと
 名〜〜〜〜を食の積守恒
 その〜〜〜のぬ馬士の園と〜
 花のよまあはつ〜脛と〜や
 む〜〜〜へ〜と嘆續乃〜
 全 全 人 全 角 全

疱瘡自の透とあはるる歯の
 唱のさきとす色あまのさ
 あまのさきとす色あまのさ
 後さひよやのさきとす色あまのさ
 とおとさきとす色あまのさ
 乃能さきとす色あまのさ
 是物を礎とすてと川 腕
 明日の妙友とすてと月の影
 人 雪 同 越 人 嵐 雪 越

去さきとす色あまのさ
 つき家の醫者乃後あや
 ちさきとす色あまのさ
 人 越 雪 人

川越乃其よさゆけり種の雨
ぬふと柳のるの秋のまのまの
つせこまのつりあのくかのすの後の
すくのまのあの比のののまのりのひ
更のあののの海のをのびのつのとのあの飲の
こそのくのりのあのりの相の信のやの後の
岸ののの松のあのちのあのあのつのをの見のかのりの
旅のをのあのらのちのののらのまのあの聲のと
梧 水 梧 水 梧 水 梧 水

煮く玉の子のあのまのののまのまのこのとのまの入の
下のくのりの皆のいのくの月ののの水の平のるのきの
耳のやの齒のやのくのくのくのものまの子の能の教のあのすの
夕のはの是の免のさの残のさのまののの初の午の
いの川のやのりのものまのまのまのあのぬのあのかのんの
山の伏の後の了の人の志のるの係のたのりのあのあの
とのりのくのくのとのくのくのまのあのぬのあのまの車の
柁の灯のるのての係の同のさのまのあのあのあの
水 梧 水 同 梧 水 梧 水

何よりを泣きし髪を振おほひ
 去りくおもはばは紙たきこ
 ちりし馬のせき
 くらふ舟を能くわたり
 雨やまきれらるる面白
 柳ちよのやしの道
 朝なうく月くさり花五十間
 寂しき秋は女まゝあり

梧 水 梧 水 梧 水 梧
 同 水 梧 水 梧

白の上もくちりしやち
 木もくちりしやちの滴
 船よの千鳥はるる川地
 誰とアもなとへ見るとは
 水も流るるくちりし水
 ぬらりと流ると雨を雀鳴也

水 同 梧 全 水
 梧 水 同 梧

一里 此炭膏をきいつるを能く
 かきひの支筋 瓶氷る 胡
 ささくはや正木を引く後 及
 肩まぬをうき 洞くまふ人 長虹
 夕月 能入きを早き 橋くまハ 嵐弾
 たつりに 鯉を つまむ 秋 一井

一里 此炭膏をきいつるを能く
 かきひの支筋 瓶氷る 胡
 ささくはや正木を引く後 及
 肩まぬをうき 洞くまふ人 長虹
 夕月 能入きを早き 橋くまハ 嵐弾
 たつりに 鯉を つまむ 秋 一井

里深く誦まきり二三月 長虹

ま司の妻とわれら共々 胡及

向り終る子孫ありおのま 一井

昔亀やうきく切やうく文 嵐弾

うやうくやうきくやうく 胡及

やうくやうくやうくやうく 長虹

なうくやうくやうくやうく 嵐弾

蛤とアきくやうく 一井

浦風之脛吹まきり月流り 長虹

みるもかきくやうく 胡及

あ者乃きくやうく 一井

蒜くぬ香く遠くやうく 嵐弾

はるのう終あやうく 胡及

衣の子乃綿乃襦とあつ 長虹

そあきく内もさうく 嵐弾

座あもあやうく 一井

木もさかたにあま〜(びり)松の枝 長虹

秤にふる入〜(びり)乃真 胡及

け年〜なる〜(びり)冬の跡もさか 一井

は〜(びり)せき〜(びり)ついで入月 嵐弾

さ〜(びり)障子の陰跡〜(びり)さき 胡及

こ〜(びり)〜(びり)〜(びり)さかたのよ 長虹

あま〜(びり)入さのまのさ〜(びり)あま 嵐弾

衣引〜(びり)人のと〜(びり)き 一井

毒ありと兵一と地もさ〜(びり)あま 長虹

片風もら〜(びり)〜(びり)白雨 胡及

板も〜(びり)端も〜(びり)庭の内 一井

〜(びり)結も〜(びり)〜(びり)〜(びり)丸 嵐弾

〜(びり)〜(びり)〜(びり)〜(びり)〜(びり)雲 長虹

見わ〜(びり)〜(びり)〜(びり)〜(びり)〜(びり) 胡及

市負

三十一

寛政七年乙卯春三月再刻

皇都書林

筒井庄兵衛
中川藤四郎
野田治兵衛
梓行

芭蕉翁

俳諧七部集續編

此川印辰集音讀海極並心
韻子記芭蕉庵小文庫子号掛

小刻全部二冊出來

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 皇都書林 and 芭蕉翁.]

